

# ジョージ・エリオット

## —— 社会と個人 ——

林 田 弘 美

『フロス川の水車場』(The Mill on the Floss)、『ミドルマーチ』(Middlemarch)、『ダニエル・デロンダ』(Daniel Deronda)等を著わしたヴィクトリア朝女流作家ジョージ・エリオット(George Eliot)は、時代を代表する予言者でも、時代を超えた偉大な詩人の魂を神から授けられた人間でもなく、冷徹な洞察力と深い人間愛に溢れた一人の知識人、ヴィクトリア時代第1線の女流知識人であったが、これは彼女の作品のもつ魅力と限界を同時に物語るものであろう。

優越感と劣等感の振幅大きく、内気でしかも神経過敏な女性が、内縁の夫ジョージ・ルイス(George H. Lewes)の変わらぬ愛とたゆまぬ励ましに支えられ、小説家G・エリオットとして華々しい経歴を獲得し始めたのは、G・エリオット、即ちマリアン・エヴァンズ(Mary Ann Evans)が、ジョン・S・ミル(Jahn S. Mill)創刊の急進的雑誌「ウェストミンスター・レビュー」(Westminster Review)の副編集人に登用され、知識人としての固く揺るぎない地歩を築いてからのことであった。女流作家固有の瑞々しい細部の描写に豊かに色彩られているとは云え、作品全体の骨子が、その筆名を偽ることなく男性的であるのは、生物学、医学、心理学等の彼女を取り囲む幅広い知識の世界、その精神的風土に負う処大であらう。取分、当時播生期であった社会学の影響は見逃し得ぬものがある。

To the eye of Positivism Man, properly so called, does not exist. It is only Humanity that can exist, since our whole development, under every aspect, is due to society. (1)

これは十八世紀フランス実証主義哲学者オーギュスト・コント(Auguste Comte)の著作『実証精神論』(A Discourse on the Positive Spirit)か

らの引用である。「有機的」社会論を唱え、社会学を体系づけたのはコントであるが、彼の実証主義的思想は、ミル・スペンサー（Herbert Spencer）ジョージ・ルイスという、G・エリオットと交わりの深かったヴィクトリア知識人に多大な影響を及ぼした。

一つの政治的または社会的な主義なり思潮の信奉者で、自らが固く信ずるところを拡く世に問い、説くため、いうなれば「プロパガンダ」を意図して、手段のために小説の世界に足を踏み入れた訳ではなく、レッテルを貼られた場合、誰よりも困惑を隠しおえないのはG・エリオット自身であろうし、エリオットをコントの弟子とみなすのは飛躍しすぎであろうが、その根本的理念には共鳴する点が多かったのは疑いようがない。

## I

### 『サイラス・マーナー』

G・エリオットの諸作品の中で繰り返られる「社会と個人」の問題を考察するに際して、中篇佳作『サイラス・マーナー』（Silas Marner）から読み始めるのは我々にとって大きな助けとなるであろう。明治時代、平易な文章とその内容から教材に最適だとされていたこの作品は、濃く漂う寓話的雰囲気は一見隠されているかにみえるが、人間にとって「社会」とは一体全体どのような意義をもつものか、「社会」を棄てた人間が、「社会」から疎外された状況に自らを追い遣った人間がどのように変貌するかの、実に社会学的な課題が、平凡な一人の男が思いもかけず迎えるはめになった人生の旅路を中心にして直載に展開されている。

親友の婚約者に裏切られ、神への信仰と人間への信頼の情を一度に喪ったサイラス・マーナーは、生れ故郷を去り、見知らぬ土地で孤立した生活を始める。周囲との接触をすべて断ち、全く隔絶した暮しに自らを置くのだが、それはひたすら機を織り、金を貯えるだけの生活であった。

…his life narrowing and hardening itself more and more into a more pulsation of derise and satisfaction that had no relation to any other being. His life had reduced itself to the

mere functions of weaving and hoarding, without any contemplation of an end towards which the functions tended. (2)

昨日も今日もそして明日も、感情を喪ったサイラス・マーナーは、機械の如く機を織り続けるであろうことは我々にも容易に想像がつく。

ところで、このようなサイラス・マーナーの頑なとも云える生き方は、ギリシア古典、メナンドロスの『気むずかし屋』を憶い起させるものがある。主人公クネーモンも又サイラスと同様に、自らの意志によって、孤独な生き方を選択したのだが、それは、世間の有様を見て他人のために人間が心から尽すということが果して存り得るのかとの疑念を抱いたからである。人間不信になったクネーモンは、「わしは世間のうちで自分だけ、誰の助けも要るまい」(3)と自負していたのだが、井戸に落ち、義子ゴルギアスに生命を救われた時、さすがのクネーモンも嫌が上にも「一人」の限界に目覚めるのであった。好むと好まざるに拘らず、我々人間は社会の中の一単位として、人類の一員としてその役割を与えられているのであり、「一人」で生き続けることは物理的にも精神的にも不可能であることを、『サイラス・マーナー』と『気むずかし屋』の時代も場所も遙か隔って著わされたこれら二つの作品は示唆してくれる。

社会を棄てた故に一人の人間が人間性を喪失してゆく悲劇を、G・エリオットはサイラス・マーナーを通して描き出すのだが、ここで「有機的」社会について簡単に触れておこう。G・ルイスの著作『生命と精神の諸問題』(Problem of Life and Mind)は、英国で修正され伝播したコントの「有機的」社会論を理解するのに極めて有益と思われる。

...the great Social Organism is a group of societies, each of which is a group of families, all sharing in a common life — every family having at once its individual independence and its social dependence through connection with every other. .... each has its independence, although all co-operate. (4)

「有機的」な人間社会に在っては、個人はその独立性、換言すれば identity を失うことなくして他者と緊密な関係を保持し、全体社会に統合される。社会と一己にいても家族、地域社会、国家、人類全体とその形態は様々であるが、「有機的」関係の

第一歩は個人と個人の関係である。他者と「有機的」関係を結び得ぬ個人は「有機的」社会の一員になり得ない。なぜなら「機械的」関係の場合とは異なり、個と個の結びつきなくしては個と全体の相関関係は成立しないのが「有機的」社会である。我々が育くまねばならぬ「愛」とは国家や人類といった抽象的なものに向けられるのではなく、極く身近な隣人への「愛」が更に大きな人間愛と発展していくのであり、G・エリオットが家族を、地域社会を殊の外大切に考えるのもその表われであろう。個人と個人の「有機的」関係から成るのが家族であり、家族と家族の「有機的」関係から成るのが地域社会であり、それらが国家、人類へと形を変えてゆき、社会の進歩・発達には個人に、個人の幸福は社会に懸ってくるのだ。

サイラス・マーナーもクネーモンも共に、或る事情から人間嫌いとなり、社会生活を営む事を拒否するようになったのだが、G・エリオットからみれば、彼等の生活は人類の一員としての人間らしい生活から「虫けら」(insect)の生活への零落を意味する。それは、人間と動物の根本的相違が「有機的」社会に帰属するか否かに存するからだ。動物も人間と同じく学習能力が与えられているとは云え、「有機的」社会に属さないため、つまり進化する歴史に属さないため、各々の動物は生れた時点から総てを開始する。歴史は個を単位としてではなく、社会という名のもとに形成されるものであり、社会や歴史とかかわり合わない動物は、個として生れ、個として死ぬ。然しながら我々人間は、過去の先人が残した遺産の上に出発し、未来は現在の時点から展開されてゆく、しかも過去から現在、そして未来へと脈打つ時の流れは進歩の流れであり、コントの指摘する様に「人間の発達はずべて、あらゆる角度からみても社会に負う」限り、社会へ帰属を拒否するサイラス・マーナーやクネーモンの世界は、進化する歴史から疎外された動物的次元へ墮落したものである。

ところで、クネーモンが社会生活の必要性を認識するに至ったのは、井戸に落ちるという偶然起った外的状況からであったが、サイラスの人生も或る事件を契機に転機を迎えた。唯一の心の拠り所であった貯金を盗まれ悲嘆に暮れる彼の許に、神ならず現実社会からの授り者として赤子エッピー(Eppi)が現われる。雪の中で凍え死んだ母親の腕から逃れてエッピーはサイラスの家にたどりついたのであった。無機的な金への執着が、有機的な人間への愛へと変容を遂げた時、サイラス・マーナー自身の生活も再び有機的な人間性豊かなものへと回帰する。

...as her life unfolded, his soul, long stupefied in a cold narrow prison, was unfolding too, and trembling gradually into

full consciousness. (5)

停止していた時計の振子は今一度動き始め、失っていた人間への愛が復活したサイラス・マーナーは同時に現実社会へも復帰することとなる。

There was love between him and the child that blent them into one, and there was love between the child and the world — from men and women with parental looks and tones, to the real lady-birds and the round pebbles. (6)

エピイを媒介として周囲の世界との連帯感を獲得したサイラス・マーナーには今一つ果たさなければならぬ仕事が残されている。切断された過去との絆を取り戻すことである。コントは次の様に述べる。「過去との連帯感がなければ、人間は現在との連帯を充分には理解することは出来ない」(7)と。コントのこの言葉に忠実であるかのように、怠りなくもG・エリオットは、サイラス・マーナーに一度は傷心の思いで立ち去った生まれ故郷への旅に出立させる。しかもそれはエピイを連れだつての感傷旅行であった。

「社会」とは、個々人が相互に育くむ愛の横糸と、過去から未来へと進化する時の流れの縦糸、これら二つの糸が纏り合わさったものであり、現在への帰属と過去への帰属は表裏一体をなしヒューマニティを形成する。縦糸、横糸、どちらが欠けても織りなし合う糸即ちヒューマニティの糸が切れ、「有機的」社会の一員としての人間が、真に人間らしい営みをするための最も基本的な資格が失われることとなる。

ここで忘れてはならないのは、サイラス・マーナーの生きた時代とは農村社会が主流をなしていた頃であった。現代の我々がそうであるような目まぐるしく移り変わる社会の中で誰もが疎外された状況に置かれているのとは自ら事情は異なる。幾世代にもわたって祖先が住み続けた土地、そこでの自然や動物、隣人との交わりは、農村に生きる人間の愛を培い、想像力を羽ばたかせ、感情を陶冶させ、コントの説くように「人間」ではなく「人類」への認識に目醒めさせる。そのような「故郷」に恵まれなかった人間が、幼い頃からいわば流浪の生活を余儀なくされた人間が、致命的にも「愛」を育む機会を逸し、その結果倫理的過誤を犯すはめになった顧末は、最後の長篇小説『ダニエル・デロンダ』において克明に描き出されている。歴史は進歩するとの

立場を採るエリオットではあるが、英国産業革命がもたらした急激な社会変化、農村社会の崩壊と都市社会の勃興は彼女にとって対抗し得ぬ面もあったのではないか。いずれにせよ社会の進歩は革命によって過去の遺産をすべて破壊させ、破壊の次の建設といった休のものではなく、過去の遺産の積み重ねの上に「進歩」が訪れてくるとG・エリオットは考えているのだ。

現在をリアルなものとするには過去がリアルでなければならず、過去がリアルであるには過去を象徴するものが必要であり、その過去を象徴するものが外ならぬ「故郷」である。「故郷」はサイラス・マーナーの実存の一部であり、その「故郷」を棄てる事は如何なる理由があるにせよ。生きる事を放棄する事に連なり、現在と過去との絆が切れた人間は、リアリティを失った人間と化す。

現実社会との掛け橋を棄てたサイラス・マーナーの世界は幼想の世界となり、<sup>リアル</sup> 実在に対する非<sup>アンリアル</sup>実在の世界へと変容する。この作品に寓話的色彩が濃く感じられるのは、一つには主人公サイラス・マーナーが非<sup>アンリアル</sup>実在の世界に住む非<sup>アンリアル</sup>実在の人間であるからだ。

## II

### 『フロス川の水車場』

真理と愛と美を希求する一人の利発な少女が、理想と現実の相克の中で、苦悩に満ちた短い生涯を終える迄を、G・エリオットは田園の抒情性豊かな作品『フロス川の水車場』で描き出す。

激しい感情の渦を心に秘め、愛したい愛されたいという欲求が人一倍強いマギー。それだけでも彼女の人生はなにかしら破滅的な印象を我々に与える。というのは、エリオットと同世代のヴィクトリア知識人J・S・ミルは『ミル自伝』の中で英国社会を次の様に評している。

英国の国民性なり社会環境なりは、感情の発揮から幸福を得ることを不可能に近くしているから、英国人の生活体系の中で感情というものが重きおかれな

……………(8)

マギーの大きく揺れ動く感情は、幼い頃から常に周囲との異和感を生じさせ、彼女の苦悩の因であり、現実の社会環境の中ではこと志に反して精神的アウトサイダーに

ならざるを得ないことを、その過程を、執拗に追求するG・エリオットの視線はマギーの心理の微妙なかけりまでも刺し抜くものである。G・エリオットの心理描写の巧みさは周知の事実であるが、社会学的な大きな問題を処理する展望的な視点と心理学の世界にわけ入る綿密細心な視点はどの作品においても交錯し合っている事は注目に値するものであろう。初期長篇『アダム・ビード』(Adam Bede)を例に挙げれば、作者はまずヒースロップ村全体を望遠レンズで写し出す。発展する英国社会の一つの小さな礎をなすヒースロップの全体像を我々に写し出してみせるのだ。それから徐々に焦点を合わせて、アダム・ビードなり、アーサー(Arthur)なり、ヘティ(Hetty)の心の壁を顕微鏡でみるかのように克明に観察していくのだが、その際、最初に写し出されたヒースロップ村全体像は消え去ることなく、彼等が日々流す涙やこぼれる笑いを一歩退いた地点から見下ろしながら、私的な感情さえも人類の大きな流れの中では或る位置を占めている事を我々に教え諭してくれる。『フロス川の水車場』の中でも、苦悩するマギーと共に一緒になって作者は涙し絶望するが、同時にマギーを、そしてマギーを取り巻く社会を分析し、説明し、詳細な注釈を付け加えることも忘れてはいない。このように macro の世界へ向けられた視点と micro の世界へ向けられた視点が錯綜する特質は、G・エリオットを他の女流作家と比較対照して、極めて異質な存在となし、又傑作『ミドルマーチ』が数少ない大人の鑑賞に耐え得る作品の一つとして賞賛された因であらう。G・エリオットの二つの視点は、我々が作品を鑑賞するにあたって常に念頭に入れておくべき筋合いのものであり『フロス川の水車場』も単にマギーの涙の物語として読み了るのは作者の期待に応えるものではない。感傷は感傷として終わるのではなく、作者の透徹した知性がその背後に控えている事を我々は忘れてはならない。

“If there came a lion roaring at me, I think you'd fight him—wouldn't you, Tom?”

“How can a lion come roaring at you, you silly thing? There's no lions, only in the shows.” talking?”

“No, but if we were in the lion countries……”

“Well, I should get a gun and shoot him”

“But if you hadn't got a gun……”

Tom paused, and at last turned away contemptuously, saying,

“But the lion isn't coming, What's the use of  
“But I like to fancy how it would be,” said Maggie, follow-  
ing him, “Just think you would do, Tom.”  
“Oh, don't bother, Maggie, you're such a silly —— I shall  
go and see my rabbits.” (9)

「もし……」とマギーは兄トム (Tom) に執拗に問い続けるが、トムはそのような質問は全く無意味だとして斥け、そのような質問を投げかける妹を軽蔑するのであった。マギーとしては自分へ寄せる兄の愛情を確信したかった訳だが、この何気ない、幼い兄妹の交わした会話は、感情や想像の世界に住むマギーと「感情や想像で曇ることのない透明で散文的な眼」をもつトムの好対照を象徴するものであり、作品全体の基調をなすものでもある。

マギーとトムが末だ「黄金の子供時代」(golden age of childhood) を謳歌していた頃に起ったエピソードが一つある。兄と喧嘩したマギーは家出しジブシー集団の許へ逃げ込むのだった。その浅黒い容姿から、従順とは評し難いその気性から、ジブシーみたいとも野蛮のとも非難されていたマギーが、ジブシー仲間と一緒に居れば愛し愛され、周囲の世界と調和するであろうと思案した挙句の行動が家出であった。無知と幼い純情が彼女をそのような行動に駆り立てたのであったが、読書の世界でのみ、「もし…」の世界でのみ彼女の想像力を自由に飛翔させることが可能であったマギーは、その延長線上にジブシー集団を置くのだが、彼女が心で思い描くジブシーの世界と、彼女自身の目で見、耳で聞いたジブシーの世界には、当然ながら大きな隔りが存在する。ジブシー集団も又、「感情の発揮から幸福を得ることを不可能に近く」する社会環境であった。

マギーに生涯つきまとう葛藤は、彼女の内的欲求と外部の現実社会の軋轢、つまり詩人的魂と散文的社会的容易には和解し合えない対立から生じたものであるが、具体的にはマギーとトム、仲の良かった二人っきりの兄妹の精神的離反となって現われる。マギーがアウトサイダーなら、トムはインサイダーと言い表わすことも出来よう。

勤勉さを最高の美德とし、教育は投資とみなされ、誰もがsocial ladder を登りつめようとする社会風潮の許では、「ライオンなんて来やしないのに、話したってどうしようもないじゃないか」と語るトムの様な<sup>フラティカル</sup>実際的人間は尊重されるのだ。「今日、十人のうち九人の英国人は、我々の偉大さや幸福を測る尺度として富をひきあいだ



す」<sup>(10)</sup> とマシュー・アーノルド (Mathew Arnold) は述べるが、この言葉は英国の実利主義を説明するものであり、この実利主義こそはヴィクトリア朝英国を世界に名だたる産業国家に仕立て上げたのであり、そして「感情というものが重きおかれぬ」英国人の国民性を形成したのである。富の取得に動機づけられた経済社会と自己の内部との間に調和を感じているのがトムに代表される 実際的人間である。

ピューリタニズムと産業革命の洗礼を受けたヴィクトリア・ブルジョワジーの理想とする性格——情熱の制御、忍耐力、克己、仕事一筋に身心共に打ち込むエネルギー等——を持つトムの不屈の意志と実行力に、マギー、そしてG・エリオットは賞賛を惜しみはしない。事実、父親の敗訴、病氣、破産で陥った一家の窮状を救ったのはトムの働きに負うのであった。にも拘らず、感情を否定するトムを作者は非情な人間として描かざるを得ない。

我々人間は、「有機的」社会の一員として個人は社会へ、社会は個人へ必然的に「義務」を伴うものであるが、その理念とは裏腹に、偏見、慣習、法律等によって個人に様々な「束縛」を課すのが現実の実相ではないか。マギーと、トムやトムの様な散文的人間が重きをなす社会との軋轢は、「義務と束縛」の問題として考察する事は許されるであろう。

“A woman in your position has serious duties. Where duty and inclination clash, she must follow duty”

“I don't deny that,” …… “But one may say very true things and apply them falsely. People can easily take the sacred word duty as a name for what they desire any one else to do.” …… “I feel at liberty to marry the man I love and think worthy, unless some worthier duty forbids.”<sup>(11)</sup>

これは『ダニエル・デロンダ』からの引用で親の反対を押切ってクレスマー (Herr Klesmer) と結婚する決意を報告するアロウポイント (Miss Arrowpoint) と母親の対話であるが、「義務」と「束縛」の微妙な相違を如実に物語るものである。

「有機的」社会の一員としての「義務」に抵触しない限り、無闇に「神聖な言葉」を濫用することは個人の自由を制限し、社会の掟の中に埋没させてしまう。「義務」

とは功利主義者ゲイの言葉を借れば、「幸福になるためにある行為をなし、あるいはなさぬことの必然性であり」<sup>(4)</sup>本来ポジティブな性格を有しており、それは個人の可能性を導き高めるはずのものだ。G・エリオットが糾弾しようとするのも、「束縛」に「義務」という「神聖」な名前を与える社会の偽善性であり、感情の世界に生きようとするマギーはその犠牲者である。

マギーの前には三人の男性が登場する。トム、フィリップ (Philip)、スティーブン (Stephen) の三人であるが、彼等はマギーの人生そのものであった精神の旅路の三段階を象徴するものであった。トムは「黄金の子供時代」を、フィリップは一家を襲った不幸に打ちのめされてトマス・ケンピス (Thomas a Kempis) の説く世界に逃避した時代を、そしてスティーブとはマギーが生れて始めて異性への愛に目覚める時代を象徴する。又、彼等二人の男性との交わりは、マギーの求めた三つの世界、即ち愛と真理と美の世界の遍歴でもあった。どの世界においても調和を見出し得ず、社会の「束縛」に押し潰され、運命に翻弄されて、マギーは自然に回帰する。

マギーが誰よりも愛するトムは、激しく揺れ動く彼女の感情を理解するどころかむしろそれは彼の非難の対象であり、彼女の愛は報われない。「自我を捨てなさい。身を委ねなさい。そうすれば心の平和を大いに享受出来るでしょう」<sup>(5)</sup>と諭するトマス・ケンピスの殉教者の世界に酔いしれるマギーに、真理と知識の世界を開て見せたのはフィリップであった。然しながら、フィリップは父親の人生を狂わせた敵<sup>かたき</sup>の息子であり、彼と親しく交わることは、父親と兄を裏切ることとなる。忘れていた美の世界を思い起させてくれたスティーブンを審美的に恋すれば、彼の婚約者である従妹ルーシー (Lucy) の信頼を裏切り、マギーに思いをよせるフィリップの心を、不具なため頑なに閉じていた心であったがマギーにだけはそっと扉を開けてくれた、傷つきやすいフィリップの心情をも踏み倒す結果となる。「俺にはこの世の中は荷がかちすぎる」としきりに繰り返される父親の嘆きは、大人に成長してゆく過程でのマギーの心からの悲痛な叫びとして我々読者の耳にこだまする。

網の目のようにめぐらされている「社会」にあっては、その目をくぐり抜けようとするればする程、ますます一層その小さな穴の中にはまり込み逃げ場を失う一匹の魚と化した個人は、必死の努力のいかなくも、小さな過失怠惰、一瞬の心のゆるみから大きな不幸を自らに呼び起こすのだ。マギーとスティーブンの逃避行も彼女が一瞬、文字通りほんの一瞬間いを放棄したことから起きた事件であり、良かれと思ってなしたことも、期待通りの収穫を得るのは至難に等しく、むしろその逆により困難な事態に

遭遇するはめになるような交錯し合う人生の哀しくも厳しい諸相が、マギーと三人の男性を中心に浮き彫りされる。

マギーは一步、一步、人生の道程を進む毎に、新たに廻らされる垣根に行手を遮られるのだが、その緊張が我々の期待を嘲笑するかの様に突如崩壊するのは、作者はフロス川に洪水を起し、マギーとトムを溺死させるからだ。現実社会では調和を見出し得なかった人間が、生命と引き換えに心の平安をかり得るのは実に安易な結末であるとしか言いようがない。後半、作者の筆の運びは粗く、フロス川の洪水とマギー・トムの溺死も、結末を急ぐため強引に結びつけたのではないかとの印象を拭い去る事は出来ない。社会と個人の軋轢も運命の影を曳きずっては、俄にその葛藤が重味を失い空転し始め、マギーも悲劇のヒロインと化してしまう。グエンドールン (Gwendolen) の部とユダヤ人が分離しているため、失敗作となった『ダニエル・デロンダ』の場合もそうであったが、G・エリオットの構成力の弱さは指摘されてよいと思われる。

ところでマギーの脳裡に焼きついて最後まで離れなかったのは、幼い頃兄と二人して手を連いで土手からフロス川の流れに見入った思い出の場面であった。ステイーブンとの逃避行から一人帰る決心をさせたのも思い出の場面であった。マギーにとって思い出の場面は「故郷」の役割を果たすのである。何時洪水を引き起すかしの魔性を秘めてはいるが、平和な流れを謳歌するフロス川と、傍に立つ兄妹の構図は、G・エリオットが心に抱く「故郷」のすがたであり、そこから出発して再び回帰する原点でもあろう。その人生がどのような軌跡を描くものであれ必ずや辿りつく原点なのだ。

註

1. A. Comte, A Discourse on the Positive Spirit, trans. E. S. Beesly, London, 1903, p.p. 117-8
2. Silas Marner, Callins Classics, p.31.
3. 「ギリシア・ローマ演劇史」第四巻
4. Silas Marner, p. 128.
5. op. cit. p. 132.

- 
6. Problems of Life and Mind, Vol I, p.p. 113~4.
  7. Republic of the West Orde and Progress, trans.  
J. H. Budes, 1910, p. 404
  8. 『ミル自伝』岩波文庫 136頁
  9. The Mill on the Floss, Everyman's Library, p. 29.
  10. quoted from Culture and Society 1780—1950 by R, Williams,  
Pelican Book, p. 125.
  11. Daniel Deronda, Everyman's Library, p. 183.
  12. 『機械の時代』講座近代思想史 V, 205頁
  13. The Mill on the Floss, p. 271.